

「対照言語学研究会」の歩み 神奈川大学における言語科学研究

武内道子

本大学には、英語、中国語、スペイン語をはじめ、母語である日本語はもとより、朝鮮語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、イタリア語と、多彩な言語を研究対象としている人が集まっている。ひとつの言語現象について、さまざまな言語での現われを話す場があったらいいという発想から、言語研究センターに研究会を立ち上げた。名づけて「対照言語学研究会」、11年目の活動に入っている。

それ以前、コーヒーカップ片手に、三々五々ことば談義に花を咲かせていた時期がある。研究へのアイデアやヒントはこういうカジュアルな場から生まれるもので、あのときの話まとめておけばよかったということも多かった。やがて、こういう論文を読んでみよう、このことについて少し調べてみよう、ではひとつまとめて話してもらおう、といった談話会的なものへとなっていった。

おりしも、1999年度に、「神奈川大学共同研究奨励」制度が始まった。この助成金を得て、産声を上げたばかりの研究会が、談話会から共同研究会へと脱皮するチャンスとなった。その後、2002年度に再度、副詞的表現の研究をトピックに、大きな助成金をいただき、集大成として、『副詞的表現をめぐって—対照研究』（ひつじ書房）を上刷したのである。昨2007年度に、「神奈川大学国際交流（学術研究）事業計画」の一環として、本研究会が「国際文化交流と言語科学」プロジェクトを推進、国際シンポジウムを開催した（みな

とみらいホールにて）。これを骨子に、センターの紀要30周年記念特別号と銘打って、『言語の個別性と普遍性』を出版した。センターの共同研究会は年々ひとつ二つと増えていき、一方で予算は不変という状況であるから、研究会として機能するには、こういった助成金制度は貴重で、ありがたいものである。2005年度から上記研究奨励制度が「神奈川大学共同研究助成」制度とリニューアルし、センターや研究所所属を離れ、学部を母体とすることになった。われわれの研究会は「モダリティ」現象をテーマに今年度から3ヵ年、助成金を交付されることになり、初年度の活動が始まっている。そして相変わらずセンターにその拠点を置かせてもらうことにした。

言語の普遍性は、言語獲得能力が遺伝的に決定されているという主張の論拠である。その生得性の証拠は、個人の属性としての言語に関する知識（言語知識）に求められる。われわれ言語科学者は、言語知識を、ちょうど呼吸をつかさどる肺や気管、あるいは消化をつかさどる胃や腸といった器官とパラレルに、心的器官としてとらえる。しかし、この器官は肺や胃と違って、脳を断ち割っても、レントゲンを撮ってもその存在を確認することができないから、仮説として提示するしかない。しかしながら、客体としての言語がある。言語事実を観察し、記述するという帰納的側面が、物理学などの純粋に演繹的な学問とは違うところである。そのありようを、なぜ今あるようにある

のかを説明する姿勢によって、その存在を確かめていく。説明を行うためには、何らかの理論の存在が不可欠である。

われわれは、多彩な言語からの検証と、それぞれの理論的基盤による多彩な切り口とから、人間

言語の華麗な豊かさが理解できるという信念を持ち、言語科学を人間の「こころ」の研究の中核をなすものと位置づけている。メンバーの枠は流動的でありながら、常にひたむきに取り組む姿勢を続けていきたいと願っている。
